

通常の小学校で学ぶ弱視児童の図画工作で用いる道具の操作の困難と指導の工夫

ー工具・接着剤・描画および写生に用いられる道具に焦点をあててー

〇二宮一水

戸嶋純那

福田奏子

佐島 毅

（筑波大学大学院人間総合科学学術院）（筑波大学大学院人間総合科学学術院）（宇都宮大学共同教育学部）（筑波大学人間系）

KEY WORDS: 弱視児童 道具 図画工作

1. 目的

道具は、初等教育の教科教育の学習場面等においてその活用が必要不可欠である（Schnech・Battaglia, 1992）。特に図画工作は、はさみなどの道具の操作技能の習得・習熟が必要な教科である。一方弱視児童は、見えにくさを背景とした弱視児特有の困難があるため、道具の操作においても困難を有している（大倉・秋山, 1995）と考える。そこで本研究は、弱視通級指導担当教員を対象に、通常の小学校で学ぶ弱視児童の図画工作で用いる工具・接着剤・描画および写生に用いられる道具の操作の困難と指導の工夫について明らかにすることを目的とした。

2. 方法

（1）対象者：視覚障害教育の専門的立場から通常の学級に在籍する弱視児童の支援に携わっている教員は主に弱視通級指導担当教員であることから、機縁法により弱視通級指導担当教員6名を対象とした。

（2）道具の選定基準およびインタビューガイド：調査で取り上げる道具は、図画工作の教科書および学習指導要領を参考に各学年で使用されている道具を 15 個抽出したうち工具、接着剤、描画および写生に用いられる道具に焦点をあてて、金づち、のり、セロハンテープ、水彩絵の具の4つの道具を取り上げた。インタビューは、4つの道具について①弱視児童の道具の操作においてどのような困難があるか、②弱視児童の道具の操作の困難に対してどのような指導の工夫をしているかについて回答してもらった。

（3）手続き：インタビューの内容について、対象者に書面および口頭で説明し同意を得たうえで行った。非構造化面接によって実施し、面接内容は IC レコーダーで記録した。質問に回答する際、これまで指導してきた弱視児童の実態を踏まえて述べてもらった。所要時間は1人あたり 30 分から 45 分程度であった。

（4）分析方法：IC レコーダーで録音したデータを逐語録化し、その後調査項目ごとにカテゴリー化した。カテゴリー化したデータの分類においては、二宮・佐島(2019)および佐島(2009)の困難さの要因および有効な指導の観点と具体的な手立てを参考にするとともに、視覚障害を専門とする大学院生2名、大学教員1名の合議により決定した。

3. 結果

（1）金づちにおける困難と指導の工夫：困難は合計で6件の回答があり、【金づちの操作】などの3つのカテゴリーが抽出された。指導の工夫は合計で21件の回答があり、【多様な困難に応じたきめ細やかな指導の工夫】などの2つのカテゴリーが抽出された（Table 1）。

（2）のりにおける困難と指導の工夫：困難は合計で 10 件の回答があり、【のりの感触の苦手さ】などの4つのカテゴリーが抽出された。指導の工夫は合計で 25 件の回答があり、【道具・教材の工夫】などの3つのカテゴリーが抽出された。

（3）セロハンテープにおける困難と指導の工夫：困難は合計で 11 件の回答があり、【セロハンテープを切ること】

などの3つのカテゴリーが抽出された。指導の工夫は合計で 11 件の回答があり、【道具・教材の工夫】などの3つのカテゴリーが抽出された。

（4）水彩絵の具における困難と指導の工夫：困難は合計で 19 件の回答があり、【細部の見えにくさに関すること】などの5つのカテゴリーが抽出された。指導の工夫は合計で 39 件の回答があり、【道具・教材の工夫】などの6つのカテゴリーが抽出された。

Table 1 金づちにおける困難と指導の工夫

	カテゴリー	項目	件数
困難	金づちの操作（4件）	・ 釘が曲がった時、垂直に打つことが難しい	2
		・ 釘を横から打つため釘が曲がる	1
		・ 腕全体を使って金づちを振ってしまう	1
困難	細部の見えにくさに関すること（1件）	・ 視力の低い弱視児童は、見えないために近づき金づちがメガネに当たってしまう	1
		金づちに対する恐怖心（1件）	1
指導の工夫	道具・教材の工夫（8件）	・ 垂直に釘が打てるように木などを挟んで練習を行う	2
		・ 紙を重ねて2～3cmの厚さにし、面の部分で釘打ちの感覚を体感させる	1
指導の工夫	指導の工夫	・ 粘土で釘を打つ練習を行う	1
		・ 釘の頭の所に蛍光で印をつける	1
指導の工夫	指導の工夫	・ 木とのコントラストをはっきりさせるために色付きの釘を使用する	1
		・ 適切な位置でかなづちを持てるように、柄に印をつける	1
指導の工夫	指導の工夫	・ 導入の段階で個々に合った教材を選ぶ	1
		・ 釘を持つ手と金づちを打つ手が協応するように練習を行う	2
指導の工夫	指導の工夫	・ 手首の振る感覚や金づちと釘との距離感が掴めるように時間を確保し練習を行う	2
		・ 金づちの平たい面と丸い面を触って確認を行う	1
指導の工夫	指導の工夫	・ 金づちの平たい面と丸い面の使い分けの説明を行う	1
		・ 経験のない弱視児童は、金づちのおもちゃを使用し積み木の上で釘を打つ練習を行う	1
指導の工夫	指導の工夫	多様な困難に応じたきめ細やかな指導の工夫（13件）	1
		・ 釘を使用せず、金づちをふる練習のみ行い体で体得させる	1
指導の工夫	指導の工夫	・ 段ボールのような柔らかい素材から釘を打つ練習を行う	1
		・ 釘が半分入っている状態から釘を打つ練習を行う	1
指導の工夫	指導の工夫	・ 釘が半分入っている状態を打つことができた後、最初から釘打ちを行う	1
		・ 何度も釘を打つ練習を行う	1
指導の工夫	指導の工夫	・ 1つの事の指導を行う時はそれ以外の指導を行わない（釘の打ち方の練習をする時は、釘が斜めになっていても気にせず釘の打ち方の練習のみ指導する）	1

4. 考察

困難は合計で 37 項目、46 件の回答が、指導の工夫は合計 73 項目、96 件と多くの回答があったが、複数の教員が共通して挙げた項目は極めて少なかった。このことから、弱視児童の4つの道具の操作の困難および指導の工夫は多様であり、二宮ら（2019）の刃物に関する先行研究の知見を支持した。弱視児童は個々によって見え方や見えにくさが様々であり、これまで受けてきた教育や生活経験によって視経験が個々に様々であることから、弱視児童における道具の操作の指導は、個別に弱視児童の見え方やどのような道具の操作の困難があるか等の実態把握を行い、個に応じた配慮や工夫を行うことが重要であると考えられる。4つの道具のカテゴリーの内容に着目すると、複数の道具に共通するものおよび独自のカテゴリーがあった（道具の操作の困難および指導の工夫）。このことから、複数の道具に共通する観点および道具特有の観点から、困難と指導の工夫について捉えることが道具の指導において重要である。

5. 結論

弱視児童における金づち・のり・セロハンテープ・水彩絵の具の4つの道具の操作の困難および指導の工夫は多様であった。道具の操作の指導において弱視児童の個々の実態や道具の観点から、配慮や工夫を行うことが重要である。（NINOMIYA Hitomi, TOSHIMA Junna, FUKUDA Kanako, SASHIMA Tsuyoshi）